

## 泣き虫なまいきハインリヒ・ハイネ

——ハイネの女性像・女性観——

立 川 希代子

Frech und weinerlich

—Frauenbilder in Heines Werken—

Kiyoko TACHIKAWA

### はじめに

表題は、井上ひさしの『泣き虫なまいき石川啄木』（新潮社）から借りた。ハイネと啄木は、それぞれの国の産業革命、資本主義の発展期に、並はずれたロマン主義的素質とリアルに物ごとの本質を見ぬく目を有しつつ、時に高揚する使命感にもつき動かされて生き、書いた「詩人兼ジャアナリスト」（ハイネについての芥川の言葉）であったこと、時代に先んじた強烈な自我意識や、必ずしも恵まれぬそれぞれの個人的事情（病氣と借金は共通）をかかえ、生きにくさを嘆きつつ書き続けたことなど、共通点が多い。ふたりとも泣き虫で、生意気だった。

井上戯曲の本人（啄木）以外の登場人物たる家族や友人は、自分を殺して、というのでは決してないが、そして、常に支える側であるとは限らないが、いつも啄木とともにいる。ハイネはもっと孤独だった。彼の家族・友人は、井上戯曲の、あるいは実際の啄木の家族・友人ほどには濃密に彼とかかわりを持たなかった。そして若い頃にも、その後の人生においても、ハイネの傍らには、「節子的」な女性パートナーは存在しなかった。それは、彼が西洋の詩人だったからであるが、もうひとつ、彼の女性観の二重性がもたらしたものであったかもしれない。ハイネの女性についての泣き言、生意気発言は、詩や散文から拾い始めたらきりがない程多いが、他の場合に比べると、日常レベルの、厳しい検証を経ずに発せられた言葉である場合が目立つ。一方で、ハイネは、サン・シモニズムをはじめとする時代の新思想との関わりの中で、女性解放の思想も視野に入れていたし、解放思想を担う女性たちとの交渉を、少なくともその一部を、大切なものと受け止めていた。視野を保ちつつ、物ごとの本質に迫る目がこのテーマに向けられた場合には、世に先んじた女性についての独自の見解が生み出された。事例は少なくとも（あるいはだからこそ）それらはキラリと光っている。

## 1 「彼女はぼくを愛していない」

ばら ゆり 鳩 太陽  
以前 ぼくは それらを全力で愛していた  
今はちがう 今ひたすら愛してるのは  
ちいさくて たおやかで きよらかな たったひとり  
すべての愛の泉たる あのひとこそ  
ばらで ゆりで 鳩で 太陽なのだ (『歌の本』抒情挿曲3)

ハイネの恋愛詩人としての名声を支える詩の一つであるこの詩の「たったひとり」は、他の場所では別の特性を担って登場している。「ぼくの心がどんなに傷ついたか、ちいさな花々が知ったら……ナイチンゲールらが知ったら……金の星たちが知ったら……慰めたり、癒したりしてくれようものを……」

みんなは知らない  
知っているのはたったひとり  
ぼくの心臓を八つ裂きにした  
あのひとだけ (同22)

あるいは、「周りの多くの人々は愛や憎しみでぼくを苦しめた。

だけど ぼくを一番ひどく  
苦しめ 怒らせ 悲しませた あのひとは  
ぼくを憎みもしなければ  
愛もしなかった (同47)

この「たったひとり」の女性、青年時代の最大最深の恋の相手アマーリエについてハイネは幼友だちに次のように報告している。「彼女はぼくを愛していない。この最後は、クリスティアン、とても小さい声で言ってくれなくちゃ駄目だ。初めのほうの言葉には永遠の生気に満ちた天国があるのに、最後のには永遠の生々しい地獄がある。君の哀れな友人がどんなに青ざめ、困惑しきって狂ったような顔をしているか、ちょっとでいいから思い浮かべてくれ。……ぼくは狂った棋士だ。第一手でもう女王を失っているのに、まだ勝負を続けている——女王を求めて」。(1816年10月27日 クリスティアン・ゼーテあての手紙)<sup>1)</sup>女王アマーリエは、青年ハイネがハンプルクで商人修行をしていた時期、彼の雇い主兼後見人だった叔父の銀行家ザロモン・ハイネの娘だった。

『歌の本』中のゼーテに宛てたソネットには、「目も覚めるように美しくかわいい娘……ちいさな心臓がその娘には宿っているが、そこにはすこしの愛も燃えていない」とか、「かわいい顔のすばらしくきれいな娘さん、その澄んだ目でどうしてぼくをだませたの。そのかわいい手でどうしてぼくの心臓を引き裂けたの」とうたう詩句がある。ここでの「娘」「娘さん」はそれぞれ Mägdelein, Mädchen であり、直接アマーリエを指すものではないか

もしれない。しかし、狂おしいまでに求め、冷たく拒まれた体験、欺かれたと思い、心臓が裂かれたような思いをした、そのようなアマーリエ体験は、詩人の恋愛詩の土台となった。そのような体験は、主として、傷つき、苦しみ、狂い、愚か者と化した自分をみつめる立場から詩化されている。相手の女性は、ペトルカ調の形容のみで終わっている場合が多い。恋人が他の男と結婚する場面を歌う一連の「結婚式の歌」(Hochzeitsgedichte)においても、描かれているのは、主として、片隅の、あるいは逃げ出す自分の姿である。自分を見つめる極致が、つぎの詩であろう。

夜は静か 通りは静まり返っている  
この家には ぼくの恋人が住んでいた  
恋人は とっくに町を去ってしまったけれど  
家はまだ 同じ場所に建っている

一人の男がそこに立って 家を見上げてる  
苦しみに耐えられず 手をよじっている  
その男の顔を見て ぞっとした  
月が見せてくれたその顔は ぼくの顔

ぼくの分身のきみ 青ざめた男よ  
なんだって ぼくの恋の悩みをまねるんだ  
昔同じ場所で 幾晩も  
ぼくが悩みぬいた 恋の悩みを (『歌の本』帰郷20)

失恋がまだ「昔」でなかった時期に作られたつぎの詩には、女性の姿が垣間見えている。

山や城が 見下ろしている  
鏡と光るラインを  
わが乗る舟は 帆走る  
陽を浴びながら

金色の波のたわむれを  
見ているうちに  
胸の奥にしまっておいた  
思いがよみがえった

うわべには悦び 胸には企み  
流れよ お前は恋人に似ている  
あのひとも親しげにうなずいて  
無邪気にやさしく 微笑んでくれたのに (『歌の本』小曲集7)

裕福な家の娘だった従妹のアマーリエは、異なる世界からやってきた従兄を挨拶の笑顔で迎え、時には二人だけの時間を過ごし、くつろいで微笑んだにすぎなかったろう。彼女の拒絶は、一族とはいえ豊かでない文学青年の目前で、すでに大ブルジョアだった家族の扉が閉じられた、ということだった。後に「さげすみの城」(Affrontenburg)と形容した邸宅で、アマーリエの加わっているパーティーの明かりを下の庭の暗闇から見上げていた、というような体験と結びついていたので、恋人の微笑が Tücken (企み、策略) と受け止められ、それが引き起こした鋭い痛みは、消しがたく詩人の身体に残った。ひざまずいて求め、言いようもなくあっさりとは拒まれた恋をうたう詩は、若い時期のみならず、中期にも、晩年においても、数こそ徐々に減るものの、基調をなすものであるかのように、延々と作られ続けた。

## 2 「女とは……」

30歳前にかかれた早すぎる自叙伝『イデーニル・グランの書』(1826)は、「たったひとり泣かなかった」ひとへの泣き言で始まっている。「彼女は愛すべき人だった。それで彼は彼女を愛した。彼はそうではなかった。それで彼女は彼を愛さなかった。……この芝居で、ぼくは昔主役を演じました。女の人たちはみんな泣いてくれたのですが、たったひとり泣かない人がいました。一粒の涙も流さなかった。それがまさにこの芝居のポイントだったのです」。

とはいえ、「奥様」(Madame)に語りかける形式でこの作品が書かれた「現在」においては、「ぼく」はすでに恋多き男になっている。「ぼくは、この世に女性のいる限り愛し続けます。ひとりの女性への熱が冷めてもただちに別の女性に燃え上がります」。「ぼくは、他の人が体のすべてで一生かけて享受するより多くを、ただ一瞥で享受することができます」。同じく自伝的要素の多い『シュナーベレヴォプスキー氏の回想から』(1833)では、これと同じ頃の思い出として、ハンブルクの歓楽街ドレーバーンのアポロホールや中心街の散歩道のカフェで、馴染みの女性たちあるいは通りすがりの女性たちを品定めしつつ眺めている自分が回想されている。

パリへの移住(1831)後、ドイツとフランスの文化的「橋」となるべく散文を多く執筆していた時期を経て、韻文へ復帰した時期の始めは、サン・シモニストたちと活発に交流した時期とも重なっており、様々な女性たちとの交流を軽やかに、伸びやかに、直截に表現する詩が多く作られた。

日ごとに消えていく青春のかわりに  
ぼくはすばやく事を行う図太さを得た  
いよいよ大胆になったぼくの腕が  
いよいよ細くなった腰を抱く

(『新詩集』 ヨラントとマリー 4)

暗い男の「恋の悩み」(Liebesleid)は、快楽と悩み(Lust und Leid)の並存の悩みに変わった。知り合って間もない友人ラウベへの真面目な手紙(1833年7月10日)<sup>2)</sup>を「ヒップのラインがきれいな」女友だちのベッドで書くなどということもあったこの時期の恋の悩

みは、嘔み付かれたり、爪をたてられたり、といった直接的苦痛、恋の成就以前に忍び寄るその後の苦さの予感、死のおそれ、そして相変わらず女性の不実への不安、裏切られた苦痛……快樂として享受するのは、腰の他、目とくにまなざし、手、腕、首、額、髪、肩、動く足、声、もちろん口や胸も。

若くてかわいいおまえ  
きどった口がしゃべることなど 信じない  
そんな大きな黒い目が  
お堅く道德を守れるわけがない

こんな茶縹の服なんて  
脱いで裸になりなさい 好きだよ  
だからその白い胸にキスさせてくれ  
白い胸のひとよ わかったかい

(『新詩集』 アンジェリク 3)

ハイネの創作 (Dichtung) が、真実 (Wahrheit) から遠いことが、とりわけ恋の詩について、研究者から指摘されている<sup>3)</sup>。初期の失恋の悩みをうたう詩における同様に、中期の快樂と悩みをうたう詩においても、実際の体験以外の多くのものがその詩的表現には含まれているであろう。創作であることが明らかな『ル・グランの書』や『シュナーベレヴォプスキー』以外の自伝、晩年の『告白』や『メモワール』も、虚実が入り混じったものとして受け取られている。ハイネの諸作品がそのようなものであるとして、彼の「女とは……」発言の場合はどうなのだろうか。はじめに述べたごとく、真実に近い本音発言と思えるのだが、こうした場合も、ハイネの必要に応じて一方的になれる傾向が作用しているかもしれない。ともあれ、彼の「女とは……」発言をいくつか拾い出してみよう。

「女性たちは毎日自分の世界観を変え、しかも大抵それを自覚していない……彼女らは、意見を衣装のようにしょっちゅう取り替える」<sup>4)</sup>。「おお、女たち……彼女らはおおいに愛する。それどころか、大勢を愛する……われわれ男性の作家が……物ごとに賛成か、反対か……で書くのに対し、女性たちは、一人の男に賛成か反対かで、もっと正確に言うと、一人の男が原因で書く」<sup>5)</sup>。老いた女、太った女は遠慮のない揶揄の対象で、老いて太った女となると「失った若さを体重で穴埋めしている」。改宗ユダヤ人を批判したい場合には、ベルリンの老女たちの教会通いが槍玉にあがる。とりわけ、美人を防御せんとするかのようには困っている醜い老女が嫌われる。とって美しい女性が、この種の攻撃を免れている訳ではなく、「美しい女性は、お世辞を3000年覚えて」おり、美しいからには不実に違いない、と断定される。「ルクレスは、自害しなかったら妊娠していたろう」<sup>6)</sup>と想像を巡らし、マグダレーナを描いた絵を見ながら「もうすぐまた誘拐されるだろう」<sup>7)</sup>と心配している。おしゃべりな女性たちにも厳しい。「ドイツ女性は黙って床入りする」からよい、と言いつつ、12年ぶりに昔の恋人と会った「再会」では、相手のおしゃべりに腹を立てて急いで帰ってきてしまう。

娼婦が讃辞の対象になることもあるのだが、若い時期のゼーテに宛てたソネットでは「彼女らは自分の罪を誇っているが、その前に屈したりはしない」と決意を語り、プレイボー

イに変身した後は、誘いを断らぬ理由として「今は鼻づまりだし、……どうせ夜には花はみんな灰色」と、けしからぬことおびたしい。りんごを道に置いて争いを起こさせるのは女性。メキシコに戦争をもたらしたのは、コルテスの守護神としての天国の女領主マリアとアステカ族の守り神ヴィツツリプツツリの叔母にあたるねずみの女王。女性は、ばかで、浮気で、風のように不実で、裏切った女性のほうも不幸で惨になったから「恨みはしない」とうたう。そのように女性を見下しつつ男性としての姿勢を立て直すことで、失恋に悩んだ暗い男は女性たちを楽しみつつ活写する男に変身しえたかのである。

物語詩などでは、各種のイベントを華やかに彩りつつ見守る役柄で女性たちが登場している。あるいは勝者を讃え、敗者を慰めるために微笑む女性が配置される。旅行の相手としては天使のようなポーランド女性がふさわしく、結婚の相手としては家事・育児に長けたドイツ女性が望ましい。……女性を客体視する男性中心の視線であり、国別に割り振られた性別役割論である。生意気、辛辣のかたまりである。ハンス・カウフマンの言葉を借りれば「ハイネは明らかに愛情なしに女性のことを描くことができた」<sup>8)</sup>。ただし、それだけではない。

### 3 クレオパトラへのまなざし

中期の物語詩「メッテ夫人」(『新詩集』ロマンツェン)で、メッテは、歌の上手な友人に「おれの女房は、そんなものには誘惑されない」と請合って賭けをしたばかりに、妻と友人の双方をうしなってしまう。歌の魔力を知る詩人であるハイネは、ここで夫のメッテを笑い、非難しているのであって、行為としては明らかに夫を裏切ったメッテ夫人は、不問に付している。あるいはむしろ、同情している。1840年代の通信文では、夫を毒殺した被告人の女性のやむを得ぬ事情に最大限の理解を示し、社会の中の女性が置かれている状況にも同情を寄せつつ筆をすすめている<sup>9)</sup>。若い頃から人権や解放の問題が最大の関心事であったハイネには、ドイツやフランスの男女のありかたがよく見えていた。『フランスの舞台について』(1840)における演劇批評のなかでは、「フランスでは夫と妻が同じ闘争力で対立しているので、恐ろしい家庭戦争が始まり」<sup>10)</sup>、「家庭的なものが喜劇の主なモチーフとなっている」<sup>11)</sup>点に注目している。先の通信文には、フランスの女性の不幸はバラにくるまれているけれど、女性の問題としては同じという意味の発言もある。

シェイクスピア劇のヒロインたちの銅版画にスケッチ風の小文を付す『シェイクスピアの女性たち』(1838)のテーマは、「女性とは裏切るものなり」である。何十人かのヒロインのうち、裏切りのテーマを担って登場するのは、悲劇の部冒頭の『トロイラスとクレシダ』におけるクレシダ、同じ作品のヘレナ、中心部分の『アントニーとクレオパトラ』のクレオパトラ、そして終わり近い(悲劇の部としては、であるが、喜劇の部のヒロインに対しては、ハイネはセリフの引用ですませている)箇所『ヴェニスの商人』のジェシカである。

クレシダは「トロイラスに永遠の誠を誓い、手続きを踏んでそれを破り、ため息をつきつつ女の弱さを独白した後、ダイアミディーズに身をまかせる」。クレシダにはもともと取り持ち役なんていらなかった、とハイネは言う。同じ作品で脇役として登場しているヘレナの場合には、ハイネはヘレナの、ではなく女性全体の不実の的を定めて、聖書を改竄す

る。「女性の皆さん、あなた方の中で、まったく純潔という方はどうぞこのあわれな姉妹に石を投げてください」。

「クレオパトラはおんな (ein Weib) である」と、ハイネは二度繰り返す。はじめの文には「彼女は愛し、かつ同時に裏切る。女性たちが、我々を裏切った場合、我々を愛することもやめたと思うのは、まちがっている。彼女たちは、生まれついた自然に従っているだけだ」が続き、あとの文には「言葉の最も優しい意味で、そして最も恐ろしい意味でおんなである」が続いている。おおらかにアントニーを愛し、気まぐれで彼を悩ませ狂わせたあげくひどい裏切りを働き、裏切りの結果恋人が永遠に失われるその瞬間にはじめて自分の愛の深さに気づくクレオパトラ。「ローマの狼」アントニーの地球を覆うごとき愛を誇り、讀えつつ、縦横にもてあそぶ「エジプトの蛇」クレオパトラ。彼女に対する詩人の関心には、「ベルシャザル」詩へのハンス・カウフマンの解釈に倣って言えば、「ひそかな驚嘆も働いているように見える」<sup>12)</sup>。子供の頃、クレオパトラが大嫌いな先生から、彼女がアントニーに塩づけの魚を釣らせた逸話を聞いたとき、欺かれたアントニーに対して「腹を抱えて笑った」ハイネは、「クレオパトラが登場する最初の場面で、この美しい女王の頭のなかで絶えず音立てている、華やかにひらひらと舞う女の移り気を、惚れ惚れするほどのリアルさで」描き出すシェイクスピアの力量にも感心している。

『ヴェニスの商人』のヒロインとしては、ポーシャに先んじてジェシカが取り上げられ、彼女の裏切り（父親に対する）がクローズアップされる。ハイネは、父親シャイロックの切ないまでに激しい愛をあっさり裏切るジェシカに対して、厳しい。ジェシカは、ハイネ自身の「生まれつきの魂の倫理」（美や熱情によることなく女性を知ったことはない）<sup>13)</sup>を女性の側から実践したに過ぎない。「女に生まれなかった」ことに対する感謝を神への祈りの言葉とするユダヤ人男性たちを観察する目を持ちながら、ここでのハイネはジェシカに「ユダヤ民族の倫理性」を押し付けている。ともあれ、父娘は、次の「ポーシャ」へのスケッチ文にも存在し続け、父が娘を呼ぶ「わが子ジェシカよ」という声は、苦しめられてきた民族全体が1800年間耐え続けてきた殉難を秘めてきた胸からのみしばりだされる苦痛の大声となって、「ポーシャ」の項の最後で染みとおるように広がっていく。

後期の詩集『ロマンツェーロ』中の「辺境伯夫人ユッタ」では、ユッタ夫人が侍女に櫓をこがせてライン川を渡っている。「ぼく」が川面を見つめつつ「たったひとり」の策略を思い出した川であり、別の詩では、ローレイが危険な歌を響かせた川<sup>14)</sup>である。

辺境伯夫人ユッタは 軽い小舟に乗り  
月明かりの下 ライン川を渡る  
侍女が櫓をこぎ 夫人は語る  
「ごらん あの七つの死体を  
わたしたちの後を 追うように  
こちらへ泳いでくるでしょう  
あの死者たち なんと悲しそうに泳いでること

あの騎士たちは 若い恋に酔って  
わたしの胸に そっとすがりつき

まことを誓ってくれたの ぜったいに  
その誓い破らぬように  
誓いのすぐ後とらえさせ  
おぼれさせたの  
あの死者たち なんと悲しそうに泳いでること」

侍女が櫓をこぎ 夫人は笑う  
あざける笑い声が 闇に広がる  
水から 死体が腰まで姿あらわし  
手をさし上げ 指をひろげる  
誓うように  
ガラスの目つきでうなづく  
死者たちは 悲しげに泳ぐ

(『ロマンツェーロ』歴史調)

ユッタ夫人には、ハイネが散文でしばしば触れる「ネルの塔」の女主人マルグリットの面影があり、彼が初めてそのモチーフを文学に導入したといわれるサロメの面影もある。男性の裏切りを極端な手段で封じ込め、残酷で熱い情念に浸りきっているユッタ夫人を詩人は冷たい目で見下しつつ眺めている。それは確かだ。しかし、夫人の笑い声が、水面にそしてあたり一面に響き拡がるなか、詩人は、かつての「ローレライ」の漁師のように、その響きを味わっていないだろうか。終生克服されえない傷を身体に抱えつつ、女性たちをあざけり笑うことで、また一方、のびやかに女性たちとの交流を楽しむことで女性不信の鎧を脱ごうとしていた詩人は、若い頃の「たったひとり」とこの辺境伯夫人ユッタと、あえて選ぶとすれば、どちらに共感を寄せるだろうか。

#### 4 「静か姫」への偏愛

「静か姫」(die stille Fürstin)は、後期の詩「サバト姫」のヒロインの別名<sup>15)</sup>である。タイトルを担うヒロインとはいえ、イスラエル王子に配される副主人公である。魔術によって安息日(サバト)以外は犬の姿で暮らさねばならない王子——社会の外で生きねばならないユダヤ人を象徴している——の妻である彼女は、タバコを吸うほかのすべてを彼に許し、シャーレトのご馳走をつくり、犬に戻らねばならない夫の恐怖をやわらげる。

この姫は 世にも美しい  
真珠であり そして花  
ソロモンの女友だち  
シバの女王も これほど美しくなかった

エチオピアの青鞥なる彼女は  
才知で自分を輝かそうと  
あげく自分でつくった難問に



ながく縛られたままになったという

サバト姫は

まったく 静かさの権化

精神的闘争や論争などは

すべてお嫌いです

(『ロマンツェーロ』 ヘブライ調)

ハイネが考えた妻たるものの徳目のなかには、「静かたるべし」という一項目があるようだ。『シェイクスピアの女性たち』においても、夫から「沈黙の天使」と呼びかけられる『コロレーナス』の妻ヴァージリアが、しっかりものの姑ヴォラムニアよりも好意的に評されている。もともとおしゃべり女は嫌いである。女性にとって「沈黙は、幸福のための本質的条件」<sup>16)</sup>だそうだと。死の床での「受難の花」との言葉を交わさないままの恋。大理石像や絵に描かれた女性や死者への恋。「静か姫」への愛着は、それらともつながっていよう。

一方、「静か姫」の対極に位置するおしゃべり女の代表が、青鞥の女たちである。「ヘブライ調」において「サバト姫」に続く詩「イエフーダ・フォン・ハレヴィー」においては、詩人ハレヴィーの恋人が、つぎのように紹介されている。

彼女は キスの権利を詮索する輩でなく

ばか女博士でもない

恋の法廷で

弁じたてるような

ばか女博士(Doktrinärin)は、女博士(Doktorin)とばかな女(Närrin)との合成語であり、青鞥と呼ばれる女性たちへの反感、嫌悪をあからさまに示している。1850年代、個人的事情としては「褥の墓」(Matratzengruft)と呼んだ寝たきりのベッドに縛り付けられた時期、社会の状況としては、1848年の敗北のあと民主主義の退潮期だった時期、ハイネは、ヘーゲルからの離反と軌を一にするように、青鞥の女性たちとも袂をわかっている。1840年代に高く評価し、個人的つきあいでは「いとこ」と呼びあったこともあるジョルジュ・サンドにも、厳しい言葉を投げかけ始める。ベッティーナ・フォン・アルニムに対しては、彼女を評価するマリー・ダグーを批判するという形で批判する。揺るがぬ信頼の対象だったラーエル・フォン・ファルンハーゲンは、ずっと以前(1833)に世を去っていた。そしてパリへの移住以来論敵としてきたスタール夫人<sup>17)</sup>に対しては、改めて激しい非難の言葉がつづられた。

## 5 微笑む同志

知的であることをハイネから承認されながら、彼の批判にさらされていない女性たちも存在する。イタリアの貴族で、独立運動の運動家でもあったベルジョゾーソ夫人。「きわめて美しく、高貴で、知性豊かな」彼女の城館は、ハイネが妻マティルドとまだ同棲中だった頃、マティルドから逃げ出したいときの避難先だった。この人をハイネは、ラファエロ

やロッシーニと併記している。友人の妻で、サンスクリットを解する女性フリーデリケ・ローベルト。彼女は、ハイネが「歌の翼に君を乗せて」飛び、ガンジス河畔でともに至福の夢を見よう、と誘う相手だった。

ベルリンでの大学時代に、大学以外の貴重な学びの場となった文化サロンの主、サン・シモニストのラーエル・フォン・ファルンハーゲン<sup>18)</sup>は、ハイネにとって絶対的存在であったかのように思える。この人も、友人（ファルンハーゲン・フォン・エンゼ）の妻だった。数少ない彼女宛の手紙からも、数多いエンゼ宛の手紙のなかの彼女宛の挨拶からも、ハイネのラーエルへの信頼の厚さと、その信頼を彼女に伝えたい熱い思いが読み取れる。『ベルネ覚書』（1840）には、少年の頃垣間見ただけだったベルネのことがハイネの心に刻まれることになった出来事について語るくだり<sup>18)</sup>がある。ファルンハーゲンがベルネの雑誌論文を読むように奨めてくれたのだが、その際の彼の口調は意味ありげでせきこんだものだった。そして、その場に居合わせたラーエルの口元に浮かんだ微笑、よく知られた、なぞめいて悲しげな、充分理性的でありながら神秘的でもある微笑み<sup>19)</sup>が、その推奨に重みを与えた。……そのときラーエルは、ベルネの文体についても意見を述べたのだが、それは「彼女の言葉遣いに慣れてないときわめて誤解しやすい」話し方によってであった、と20年ちかい昔の思い出は鮮明である。

『メモワール』（1854）には、グラッペの『ゴートラント』の草稿をめぐるラーエルの思い出が語られている<sup>20)</sup>。活字になった戯曲ではやわらげられた不気味さがまだ色濃く残っていたその草稿の吟味を著者から頼まれたハイネは、その草稿に「詩人」が含まれていると気づいて、ちょうどラーエルのところへ出かけるところだったので、彼女にもひとりの詩人の初ものを味わってもらおうと持参した。文芸批評においてラーエルとハイネは同志だったからである。「ぼくたちは、匂いだけで文学的獲物が見分けられる」と彼は書き付けている。その草稿は、結局匂いが強すぎて眠れないからと、真夜中にラーエルから戻されてきたのだった。

ハイネとラーエルの「同志性」については、ラーエルの側からの証言もある。ハナ・アーレントは、同化ユダヤ人から聞かれた最初で最後の断固とした表明だったハイネのユダヤ人であることの肯定は、「ラーエルの否定と同じ理由、同じ真実から発していた。ふたりとも、自分たちの真実を和らげることはできなかった」と考察した後、本当に歴史的な意味で「彼女の魂の姿」を救ったのは、「（ラーエルの元の恋人だった）マルヴィッツでもファルンファーゲンでもなく、……ハイネである」と断定している<sup>21)</sup>。ラーエル自身の手紙も残っている。「わたしはうっかり、今さしあたり言うことができることすべてを話しました。あなたなら、このことを、りっぱに、哀愁を込めて、幻想的に、はっきりと、きわめてこっけいにいつも、響きよく、挑発的に、しばしば魅惑的に言うことでしょう。……原文はわたしの昔から侮辱されてきた心から発せられたものですが、あなたの文として残っていくでしょう」。この手紙でラーエルは、ごく親しげにハイネからの手紙を求めている。「心底から邪悪で、ひどくだらしのない手紙を出してください」（1830年9月21日）<sup>22)</sup>。

1833年7月にラーエルが亡くなった。1837年に書かれた『歌の本』第2版の序で、ハイネは彼女を偲んでいる。「ぼくがまだ若気のおごりのただ中にいた頃、真理の光に照らされていたというより、熱せられていたあの頃、いつも疲れを知らずぼくのことを考えてくれ、ぼくのことを気にかけてくれたあの心暖かな女友だちのことを思うと、かならず悲しい気

持ちになってしまう」<sup>23)</sup>。

フリーデリケを歌の翼に乗せたい、と希望した頃、ラーエルの思い出に身を浸していたとき、ハイネは反女博士の発言から遠いところにいたであろう。ヘーゲルからの離反や人格神への復帰が語られたのと同じ頃、彼は「依然として民主主義の戦士」たることを確認している。この頃にはまた、彼の恋愛観、女性観の二重性を超えるかのような詩もつくられている。「不信の男」(『ロマンツェーロ』哀哭調)は、まだなお恋の成就に自信を持てずにいるが、一方ではすでに幸福がつける傷をも予想している。

おお聖トーマス！ 信じかねるんだ  
ぼくは 疑い続ける  
指を 自分の幸福の傷に  
置く その時まで

「悪い夢」(同ラザロ17)では、病床の詩人(ぼく)の、切ないけれども健康な夢が詩化されている。夢の中で「ぼく」は若返って、オッティリーエという女性と手をつないで山を駆け下っている。姿のよい彼女の声は誠実で親しげ、話す中身は賢くて、心のこもったもの。青い、ニクセのものに似た目、バラのつぼみに似た口。愛の苦痛はなく、落ち着いたまま「ぼく」は彼女の手にくすした。

最後にぼくは ゆりを手折って  
彼女に渡したと思う そうしながら大きな声で  
結婚して ぼくの妻になっておくれ オッティリーエ  
きみのように 心清く 幸せになれるように

返事があったかどうかは わからない  
そのとたんに目覚めたから ぼくは相変わず  
病人で 病室で慰めもなく  
もう何年も そこに横たわっていた

## 6 マティルドの笑顔

ハイネの母は、教育熱心な、息子思いのひとだった。恋に傷ついた詩人の戻る先だった<sup>24)</sup>。自尊の思いが溢れるときも、息子は母の前では頭を垂れた。新婚時代から夫をリードし、暮らしの切り盛りをしていた彼女<sup>25)</sup>は、長男のハイネの教育計画を立て、教育費を算段し、勉学に旅立つ際には、荷物を詰めてくれた<sup>26)</sup>。パリから12年ぶりに帰国した「かわいいわが子」に、妻によく面倒を見てもらっているか、あるいは今はどんな党派に属しているかと問いかけた。

この母親が「抑圧的な母」だった、と言われることがある。1984年にハイネ賞をうけたPeter Rühmkorfが、その受賞演説のテーマとしたのもこのことだった<sup>27)</sup>。ハイネは、母への愛と尊敬を語る一方、「この地上のすべての人間の中で一番好きだったのは父である」<sup>28)</sup>

と『メモワール』で語っている。「母が荷物を詰めてくれた」と書いた『シュナーベレヴォプスキー』には、古代デンマークの英雄歌謡が挿入されているが、その主人公フォンフェートは、母に世間を「見て回りなさい」と背中を押されて遍歴修行に出かけるが、旅から戻った彼は、母を細切れに切り刻んでしまう。ハイネは、母の抑圧的側面を知った上で、にもかかわらず愛していた、と思われる。

妻に対しても、ハイネは二面的である。彼女と知り合った頃のラウベアテの手紙（1835年9月27日、「きわめて美しく、高貴で、知性豊かな」女性の城館で書かれた）に見られる「ぼくは、きわめて卑しく、おろかな人間を愛するようにのろわれている。きわめて誇り高く知性豊かな人間を、そのことがどんなに悩ませるか、お分かりください」<sup>29)</sup>という泣き言は、彼がそれだけ19歳のフランス女性マティルドにまいていたのだ、と見過ごすとしても、彼がマティルドをうたう詩や、彼女のことを語る叙述には大きな振幅がある。後見人の叔母に多額の金を渡して同居を始めたとか、その後彼が彼女を教育施設へ入れたとかの経緯が、二人の対等、平等をはばんだ<sup>30)</sup>。ハイネの愛情は、気遣いという形で示されることが多い。母が抑圧性を疑われたとすれば、妻は正統的な妻ではないとみなされがちだった<sup>31)</sup>。

しかし、彼らの結婚生活を丹念にあとづけたヴァルター・ヴィクトルは、別の見方を提供している。笑うだけですでにひとをくつつがせるマティルドは、ハイネをカナリアと同じくらいにしか扱わなかったが、おおらかに、優しく愛していた<sup>32)</sup>、と。彼女は、知的ではなかったけれど、すばらしい心の持ち主で、頭が受け入れなかったことを心が受け止めた。ハイネとの交渉が、彼女に同じような力を呼び起こした、と。晩年に描かれた夫妻の肖像画（Kietzによる、1851）は、くつろいだ二人を見せているが、よりくつろいでいるのは妻のほうである。

マティルドは、オットーリエのような全面性を持つ妻ではなかった。理想像からいえば大きく欠けたところがあった<sup>33)</sup>。彼女への不満や彼女に起因する鬱屈を詩人はしばしば表明した。彼女から傷つけられ、不信を抱くこともあった。が、その妻が、彼にとってはかけがえのない存在で、欠けたところのあるまま全きものであることを、ハイネは徐々に受け入れていったのではないだろうか。病床での最大の慰めは、妻の声、とりわけ笑い声だった。

ハイネの女性観の二重性は、当時のドイツ哲学のラディカル性のなかにあった保守的、観念的女性観やルソーの女性軽視<sup>34)</sup>とどこかでつながっていただろう。それでも、彼の物ごとの本質を見抜く目が、妻の大きさをしっかり受け止めていた。「夜の思い」（『新詩集』時事詩）において、マティルドの笑顔は、詩人の母とドイツにいる彼の親しい知人たちすべての重さと拮抗している。

夜、ドイツを思うと  
眠れなくなり  
もう目を閉じることもできず  
熱い涙がこぼれる

年月は 来たり去る

母に会えないまま  
12年が過ぎた  
憧れと望みが いや増す

憧れと望みが いや増す  
あの老いた人が 私の心をとらえ  
あの老いた人のことばかり 考える  
あの人を 神よ 守りたまえ

あの人こんなにもぼくを愛している  
書いてよこす手紙で分かる  
その手がどんなにふるえているか  
どんなに深く 母心がわなないているか

母のことが 心を離れない  
12年が流れ去り  
12年が過ぎ去った  
母をこの胸に抱きしめなくなってから

ドイツという国はずっと続く  
それは芯から健やかな国  
榎の木が育ち 菩提樹が育つ  
そこになら いつでも行ける

ドイツにこんなに焦がれはしない  
そこに母がいらないのならば  
父なる祖国は なくなりはしない  
でもあの老いた人は 死ぬかもしれない

ぼくが国を離れて以来  
たくさんの知人が 墓に入った  
愛したたくさんの人々が その  
数を数えると 魂から血が流れ出そう

数えずにはいられない——数えると  
ますます苦しみはふくらんで  
死者たちが 押し寄せてくる  
ぼくの胸に——ありがたい！ 消えていく！

ありがたい！ 窓から差しこんでくる

フランスの晴れやかな日の光が  
妻がやってくる 朝のように美しく  
微笑んで ドイツの憂いを追い払ってくれる

テキストは、Heinrich Heine. Sämtliche Schriften, hersg. von Klaus Brigleb, Hanser Verlag [BHH] を使用した。

### 注

- 1) Heinrich Heine. Säkularausgabe, Akademie Verlag [HSA] Bd. 20, S. 19–20.
- 2) HSA, Bd. 21, S. 56.
- 3) Hans Mayer: Außenseiter, suhrkamp Taschenbuch, 1981.  
Bernd Kortländer: Poesie und Lüge. Zur Liebeslyrik des »Buch der Lieder«.
- 4) BHH, Bd. 3, S. 83.
- 5) BHH, Bd. 11, S. 453.
- 6) BHH, Bd. 11, S. 109.
- 7) BHH, Bd. 3, S. 385.
- 8) Hans Kaufmann: Heinrich Heine. Geistige Entwicklung und künstlerisches Werk, Aufbau-Verlag, 1969, S. 178. ただし、ここでカウフマンが例としてあげている詩がそのことの好例とは思えない。  
いずれ、論じたい。
- 9) BHH, Bd. 9, S. 317–9.
- 10) BHH, Bd. 5, S. 294.
- 11) BHH, Bd. 5, S. 294.
- 12) Hans Kaufmann, S. 206.
- 13) BHH, Bd. 7, S. 96–7.
- 14) ハイネのローレライ詩が、ラインの川と山を背景にうたわれていながらも、作詩はリュエネブルクでおこなわれたことは、現在定説となっているが。
- 15) 「静か姫」の訳語は、井汲越次訳『ロマンツェーロー』(下) (岩波文庫1951) から借りた。
- 16) BHH, Bd. 5, S. 659.
- 17) ドイツ・ロマン派全集第16巻『ハイネ』(国書刊行会)における大澤慶子氏の「解説」では、「パリ移住後のハイネのフランス向けの文筆活動は専らこの動機(スタール夫人への反論)によると言っても過言ではない」。
- 18) BHH, Bd. 7, S. 10–11.
- 19) ラーエルの初期のサロンの参加者だったブレンターノも、手紙で彼女の微笑みについて語っている。(河合節子ほか編『ドイツ女性の歩み』三修社, 209頁)
- 20) BHH, Bd. 11, S. 565–6.
- 21) 『ラーヘル・ファルンハーゲン』ハンナ・アレント著, 寺島俊穂訳, 未来社, 1985, 219頁。
- 22) HSA, Bd. 24, S. 61.
- 23) BHH, Bd. 1, S. 10.
- 24) Sonette an meine Mutter B. Heine 2, BHH, Bd. 1, S. 66.
- 25) BHH, Bd. 11, S. 581.
- 26) BHH, Bd. 1, S. 507.
- 27) Reden zur Verleihung der Ehrengabe der Heine-Gesellschaft 1984. Suppentopf und Guillotine. Zu

Heinrich Heines Frauengestalten, Heine-Jahrbuch, 1985, S. 255ff.

28) BHH, Bd. 11, S. 586.

29) HSA, Bd. 21, S. 121.

30) Edda Ziegler: Die große Frauenfrage. Zu Heines Mädchen und Frauen, in »Ich Narr des Glückes«, J. B. Metzler, 1997, S. 374.

31) マティルドとハイネの住まいへの初期の訪問者のひとりだったグリルパルツァーは、「その頃、ハイネは、一人か二人の女工と暮らしていて、そのうちひとりを恋人と呼んでいた」旨、記録している（『ハイネとマチルデ・愛の生活』清水昌生訳、芸林書房、63頁）。マルクスも、マティルドを一人前の妻とはみなしていなかった。

32) 『ハイネとマチルデ・愛の生活』129頁。

33) Manfred Windfuhr: Frauenideal und Realfrau, in »Ich Narr des Glückes«, J. B. Metzler, 1997, S. 482.

34) Martha Kaarsberg Wallach は、女性の従属的地位を、ハイネがルソーやその後継者たちのように、「天与の」とか「自然の」とみなしていないことを（わずかに）評価している。

（文学部 教養教育等）